

五島敦子著

『アメリカの大学開放—ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開—』

(学術出版会, 2008年, 216頁)

福留 東土 (広島大学)

本書は、大学を社会に対して開く「大学開放」の営みを体系的に進展させてきたアメリカの大学に着目し、その最も先進的な事例であるウィスコンシン大学拡張部の初期の歴史を描いたものである。ウィスコンシン大学はいち早く大学拡張部を設置し、州立大学として州政府や州民に対する大学のサービス活動に体系的に取り組んだ大学として名高い。現実社会への大学の具体的貢献を重視するその理念は「ウィスコンシン・アイディア」と呼ばれ、多くの大学や社会の関心を惹き付け、他大学による取組みの重要なモデルとなった。著者によれば、ウィスコンシンの大学開放についてはこれまで日米で多くの研究が展開されてきたが、大学拡張部が開設され、全国に広がっていく重要な時期である1900年代から1910年代に関する大学拡張部の実態については、拡張部を明確に分析対象に据えた研究が不足しているため、十分に明らかにされていない。本書はその欠落部分を埋める本格的な大学史研究である。

ウィスコンシン・アイディア自体はわが国でもすでによく知られているが、どちらかという州と州立大学の関係性の枠組みとして理解されることが多いように思われる。このような理解はウィスコンシン・アイディアの重要な一側面であるが、より包括的な理解の仕方も存在する。著者はウィスコンシン・アイディアの定義は諸説あり、多義的であると述べている(85頁)。本書は大学の政治的な貢献よりも、州民に対するサービスの側面に焦点を当てており、我が国におけるウィスコンシン・アイディアの理解に広がりを与えるものである。また、いずれの定義によってウィスコンシン・アイディアを理解するにせよ、その実態へのアプローチはわが国では十分でない。以上のような意味で、本書はアメリカの大学の持つ重要な機能、しかも現代の大学で重要性を大きく増しつつある機能の歴史の実態に光を当てる重要な業績である。

本書の内容は大きくみれば3つに分かれる。ひとつは大学開放の枠組みと背景および先行研究の検討である

(主に序章・第1章)。これによって読者は、大学開放がどのような活動であるかということだけでなく、それがいかなる理念や思想によって支えられてきたのかをよく知ることができる。同時にまた、それらの活動に対して先行研究がどのような視点から取り組まれてきたのかを体系的かつ簡潔にまとめられている。特に、著者も述べているように、大学開放は大学の活動の重要な構成要素でありながら、高等教育研究の領域ではなく、主に社会教育・生涯教育の枠組みで論じられてきたテーマである。その意味では高等教育研究としての大学開放というアプローチは未開拓の領域であると言える。高等教育研究者である評者は、社会教育の領域で取り組まれてきた研究の蓄積やそれらの着眼点について、また大学開放に包摂される諸理念について、本書から教えられるところが多かった。

次に、アメリカにおける初期の大学開放の実践に携わり、あるいはそれを推進した人物たちに焦点を当てた考察である(主に第2・3・4章)。大学拡張部の創設を後押しした学長や、拡張部の活動に直接関わった教職員の思想や取組みが一次史料を基に分析されており、これによって大学開放がどのような担い手によって推し進められ、またどのような思想が背後に存在したのかを知ることができる。

3つ目は、大学拡張部の行った具体的な取組みに関する分析である。拡張部の組織とその活動の全体像が示される(第4章)とともに、特色ある取組みのいくつかを取り上げられ、詳細にわたる考察が展開されている(第5・6章)。ここでは、単にウィスコンシン大学における取組みそのものを解説するだけでなく、幅広い文献渉猟によって、社会的・文化的背景にまで遡って説明が施されており、それによって各取組みの意義を社会的文脈の中に位置付けて理解することが可能となっている。

さて、本書は名古屋大学に提出された博士学位請求論文を土台にしたものであるが、博士論文として模範的といえるような点をいくつも指摘することができる。その意味で、大学開放や社会連携に関心を持つ読者だけでなく、大学史や外国の大学研究を志す若手研究者にも広く一読を薦めたい。本書の特徴と意義は、著者の持つ課題意識、先行研究の分析、分析方法という3点によってまとめることができるだろう。以下、それぞれについて述べる。

(1) 課題意識について：著者は、大学開放が大学にとってすぐれて現代的な課題であることに触れつつ、しかしそれゆえにこそ、「大学開放を人類の英知の結晶と

してとらえるという、歴史的な理解」(14頁)の重要性について述べている。このような課題意識に評者は深く共感する。現代の高等教育研究において歴史研究は決して主流ではない。だが、現代の大学を深く理解する上では実は歴史的な理解を欠かすことはできない。そのような深い認識に根差した思想こそが現代の大学を導く基礎に位置付けべきだと考えるからである。しかし、現実において、大学に関する歴史研究と高等教育研究とは十分なつながりを持ってはいない。高等教育研究の側は変化する現実に追われて歴史に対する関心を示し得ない「多忙な」状態にあり、一方で歴史研究は現代的課題とはむしろ距離を置いた形で過去の諸事実の掘り起こしに専心しがちだからである。例えば評者は、この間隙を埋めたいと願いつつ、むしろその狭間で揺れ動いてしまう。それに対して本書では現代的課題の根幹となる思想や活動について歴史を通して示すという姿勢が貫かれている。おそらくそれは、「あとがき」にあるように、著者自身が成人学生として学ぶ中で大学開放の意義を体験的に理解しているからであろう。実体験に根差した真摯な問題意識が背後にあることが、歴史を通して現代的課題の根源を探るという本書のスタンスを、一貫性があり、自然で無理のないものにして思われる。

(2) 先行研究の分析について：評者が本書を博士論文の模範と考えるのはとりわけ、先行研究の分析とそれを通して自身の研究の独自性を明確に設定する手法についてである。序章では、日米の先行研究に関する広範な文献渉猟を行いながら、研究領域や分析の視点、時期区分などを軸にして先行研究を的確に配置し、各研究に対する解説が加えられている。特に、著者の設定した先行研究の各カテゴリーに沿って、冷静に俯瞰して捉える記述が秀逸である。それは、著者が大学開放を、その活動そのものだけでなく、理念や思想、社会背景まで含めて、多面的かつ包括的な枠組みで捉える視点を有していることの証左であり、それによって先行研究の分析を通して大学開放研究の全体像を立体的に可視化することに成功している。

(3) 分析方法について：以上2点は主として本書の研究枠組みに関する指摘であるが、もうひとつ、本論における分析方法について触れておきたい。本論の内容を大きく2つに分けるとすれば、ひとつはウィスコンシン大学の具体的な活動や、すでに触れた中心人物の思想や行動に関する分析である。いまひとつは、それら活動や思想の社会的・文化的・経済的背景に関する分析である。分析方法については、前者の中心は一次史料に基づく歴史分

析である。ここでは、多数の歴史史料が駆使されており、収集と読込に膨大な労力が掛けられていることが窺われる。後者については、主として先行研究に依りながら、簡にして要を得た解説が施されている。歴史研究としての本書の神髄はもちろん前者にあるのだが、これらは、分析テーマと分析対象となる史料がある程度の範囲に枠付けられており、その意味で分析対象自体は比較的明確に設定されるのではないかと思われる。むしろ、後者の「社会的・文化的・経済的背景」は、対象をどう設定し、どういう切り口でどういう材料を用いて説明するかについて、おそらくかなりの工夫が必要であり、その記述にはより大きな労力を要したものと考えられる。だが、その労を厭わず、十分な背景説明を与えて舞台設定を整えた上で中核部分の分析に当たるという手続きが取られていることは、本書の中核をなす歴史分析の価値をいっそう高いものにしていえるだろう。

最後に、本書を読んで気になった点や課題と思われる点を3点ほど挙げておきたい。

1点目は、紙幅の関係もあるのだろうが、膨大な史料をベースに置いている割には、全体的に史料の分析を通して説明が簡潔であることである。これは特に大学開放に関わる主要人物の思想の分析についてみられる。このことは、一面では読者にとって本書を非常に読みやすいものにしていえる。しかし、特定人物の思想を読み解く上ではより多面的で慎重な考察が必要ではないかと思わせる箇所も散見される。一般的に言って、歴史的な文書については、著者が各文書のどの部分をどういう文脈に乗せて取り上げるのかによって、見えてくるものが変化しがちである。その意味で、回りくどくても、より厚みを持たせた考察が行われてもよかったと思われる。

2点目は著者の提示するサービス概念についてである。本書のまとめの部分で著者は「アメリカの大学のサービス理念は、教育と研究を含めた、大学の活動のすべてを包括する概念として歴史的に生成されてきた理念であり、決して、大学の付随的な機能ではない」と述べている(181頁)。このことをさまざまな角度から明らかにしたことが本書の意義であるのだが、一方でこの捉え方には依然として若干の素朴さをも感じる。上記の引用部分に続いて著者は以下のように述べている。「大学のサービスとは、社会の埋もれた課題を発見することにはじまるのであり、解決の方法を大学の専門的知見に依拠するがゆえに、よりよい結果をもたらす」。「州立大学において、研究を高度化することと、広く社会にサービスする

こととは、相反するのではなく、両立しうる活動であった」(181頁)。地域における現実の問題と大学の専門性とのリンク、研究と社会貢献とのリンク、これら2つのリンクがウイスコンシン・アイデアを大学の社会貢献のモデルたらしめた重要な要素であることに疑いはない。一方で、これら大学の各活動はそれぞれに個性を持ち、現実には相互間の葛藤を孕んでもいる。著者が導入部分で述べているように、19世紀末に一度大学開放が衰退したのはまさにこの葛藤に一因があった。もちろん、その後この葛藤を乗り越えるさまざまな努力の中で大学開放の進展が図られたのだろうが、大学によるサービスが実態を伴いつつ上記のような理念として具現化されるようになるプロセス自体も重要な示唆をもたらすのではないかと思われる。その意味で、このような側面にもう少し記述が割かれてもよかったのではないだろうか。

3点目は、2点目とも関連するのだが、本書では大学拡張部が比較的独立に扱われて分析がなされている。しかし、拡張部が大学組織全体の中にどのように位置付き、大学執行部や他部局とどのような連携構造を有していたのかについても明らかにできれば、より多元的に拡張部の位置付けを理解することができると思われる。もちろん、この点について部分的には言及されているのだが、個人をベースにした記述が中心であるため、もう少し制度的なレベルでの現実を知りたいと思った。この点は、本書の最後で、著者が今後の課題のひとつとして「大学拡張部と大学本体の財政上の関係を考察すること」(183頁)を挙げていることとも通底するであろう。また、著者が言うように、本書の課題が大学サービスを担う学内組織として形成された大学拡張部を高等教育史上に位置付けることにあるとすれば、今後の重要な課題として位置付けることができるのではないだろうか。これらの課題は、より包括的な観点から著者自身によって提示された今後の課題とあわせて、おそらく今後の著作の中で明らかにされていくであろう。